

ドストエーフスキイと民族・宗教問題

——国際ドストエーフスキイ・シンポジウムで考えたこと

高橋誠一郎

第八回ドストエーフスキイ・シンポジウムは七月二十九日から八月二日にわたって、ノルウェーのオスロで世界の二二ヶ国から四名の参加者を迎えて行われた。

前回のシンポジウムでは、ソ連からも多くの研究者が参加するなどベレストロイカが行われていた当時の状況を強く反映したものであったが、今回もユーゴスラヴィアの分裂やソ連の崩壊といった変化を受けてスロヴェニアと新ユーゴスラヴィア（セルビア）からの参加予定者二名が参加を取りやめる一方で、前回は不参加だったベロルシアやエストニアからも発表者が現れるなど時代の急変を感じさせるものとなった。

シンポジウムでは「ドストエーフスキイと二〇世紀の宗教・哲学思想」、「ドストエーフスキイの詩学」というテーマのセッションや「ドストエーフスキイはリアリストかロマンチストか」、「『永遠の夫』について」といったパネルディスカッションも設けられて白熱した議論が行われた。また、今回は北欧で行われた

こともあり、「ドストエーフスキイとイブセン」、「ドストエーフスキイとキルケゴール」、「ドストエーフスキイとムンク」、「ドストエーフスキイとハムスン」といった北欧とドストエーフスキイとの係わりに言及した論文が多く発表された。また、期間中にも一日の午後を割いてムンク美術館の見学や同じ美術館内でノルウェーの音楽を中心とするピアノ演奏もあり、北欧の文化の一端にふれることができた。

筆者は「ドストエーフスキイにおける分身のテーマと良心の問題」という題名で発表を行ったが、今回の主な関心の一つはソ連崩壊後のロシアや東欧の動きがこのシンポジウムにどのような形で反映されるかにあった。

私は前回のシンポジウムについて、ドストエーフスキイにおける「民族性」という概念を取り上げて分析したポーランドの研究者の発表が、かつての多民族国家ソ連や東欧圏の問題点も突いていたゆえに参加者の間で激しい議論を呼んだことを報告した（東

京新聞、一九八九年一〇月三十一日、夕刊)が、残念ながら、そのシンポジウムから程なくして分裂した旧ユーゴスラヴィアだけでなく、かつての旧ソ連でもアルメニアやグルジアなどで、民族や宗教などの対立から内戦が勃発し現在にいたるまで激しい戦いが続いている。そして、それはロシアにとっても対岸の火事ではなく、領土問題などもからんでそれらがいつロシアに飛び火しても不思議ではない状況にあるのである。

今回、三年ぶりにモスクワに立ち寄って強く印象に残ったのは、歩道に机を置く露店商の並べている本の種類の豊富さで、そこにはポルノ小説や推理小説、さらにはSFなど、これまでほとんど見ることのできなかったような本が一杯に並べられているとともに、カラムジーンを初めとしてソロヴィョーフ、クリュチエーフスキイなどの革命前のロシアの歴史家の著作集がかなり多く置かれていたことである。ロシアではこれらの歴史家にタチーシチェフをも加えた切手が昨年発行されているが、このことはロシアが歴史の大きな転換点にある今こそ過去を振り返り、歴史から学ぶ事によって未来への道を模索しようとする者が少なからずいることを物語っているだろう。そして、こうした過去の文化への関心の高まりの中で、ドストエーフスキイが再びロシアの文化や正教の担い手としての位置を与えられる傾向も強まってきている。ただ、その反面、歴史文化財保護協会から派生したグループ「パーミヤチ(記憶)」がその民族主義的性格を強めて反ユダヤ主義を標榜しているように、厳しい政治的・経済的状况の中ではロシア

史への関心の増大ですらも、それが排外的な民族主義と結びつくとき、武力を伴う民族間の衝突に発展しかねない危険性を含んでいる。そして、同じことは宗教についても当てはまりそうである。つまり、信教の自由が確立されてからロシアでは宗教への関心が高まり、最近では聖書やロシアの聖者伝など宗教関係の書物も多く売られている。しかし、一見平和的に見える宗教ですらもそれが民族主義的な傾向と結びつくとき、民族間の対立を煽るという結果を招きかねないように思える。たとえば、十字架上のキリストを中心に正教を撰取したウラジミール聖公や聖職者など多くの歴史上の人物を描いて評判になったグラズノーフのキリスト教受容一千年を記念した絵では、最前列の中央に蠟燭を持ったドストエーフスキイが描かれているだけでなく、苦悩する裸の乙女の隣にはうす笑いを浮かべて座っている異教徒のバトゥ汗の姿が描写されてもいる。ロシア人の民族意識を高揚させるようなこの絵が、今もなおモンゴル系などの少数民族やイスラム教徒を多く抱えるロシア連邦において、ロシア人以外の人々にとどのような感情を抱かせるかを想像するのはさほど難しくはないだろう。

シンポジウムの最後の日には「ドストエーフスキイと現代」というセッションが設けられたが、そこで発表された論文のいくつかとそれをめぐる論議は、このような民族・宗教問題に直接かわるものであった。まず、ポーランドの研究者は最近のロシアの民族主義者たちがドストエーフスキイが唱えた「大地主義」を標榜しながら、ドストエーフスキイの後継者を自称していることを

具体的に例証し、ドストエーフスキイに対するこのような理解が生み出す危険性を指摘していた。これに対してはロシアの研究者から、そういった片寄った理解が広まらないように私達はこのような会を通してドストエーフスキイの全体像を伝えるように努力せねばならないという意見が出され、発表者から自分の意図もドストエーフスキイを誹謗することにあるのではないという表明があった。また、最近のユーゴスラヴィアの内戦に触れてそれを平等や友愛といった「理念」の崩壊と結びつけたマケドニアの発表者に対しては、現在の混乱は「理念」の崩壊と理解するよりも、かつての社会主義諸国における宗教の欠如の結果ではないかというロシアの学者からの強い反論があり、これに対してさらにロシアの宗教が必ずしも流血を防げてはいなかったと主張してマケドニアの学者を援護する意見も出された。

私にとって興味深かったのは、これらの発言が単に個人的な見解の違いだけによるものではなく、ようやく宗教の自由が確保されたロシア、長い間ロシアの政治的支配下にあったポーランド、いまなお激しい内戦が続く旧ユーゴスラヴィアに属していたマケドニアなどそれぞれの国の歴史的状况の違いをも大きく反映していたことである。そして、カトリック、正教、イスラムという宗教の違いからかつては同じ民族であった者たちが殺し合っているボスニア・ヘルツェゴヴィナなどの現状は、各々の宗教が持つ文化的な価値を認めつつも様々な宗教の違いをも越えられるような「理念」を私達が確立せねばならないことを物語っているように

思える。そしてその際、私達はドストエーフスキイの作品から学ぶとともに、ドストエーフスキイのすべてを理想化することなく後期の論文で彼が述べているような民族主義的な発言に対しては客観的な立場から厳しく批判して、多くの民族が共存できるような道を模索せねばならないだろう。

次回のシンポジウムは三年後にオーストリアで行なわれることになったが、その時、ドストエーフスキイの民族・宗教観はいかなる状況のもとで語られ、どのような議論がなされるのだろうか。これからも注目していきたい。